



上海合璧張勇さんから感謝の手紙

親愛なる董事長

董事長、お元気ですか。
わたしは2009年6月に入社して合璧一家の一員となりました。しかし、今年5月、腰椎の痛みで仕事が続けられなくなり、治療のために休暇をもらいました。そのとき本当にこの会社の温かさを知りました。会社トップの従業員に対する「関心、關懷、關照（心配りと思いやりで接する）」の気持ちが伝わってきました。こんな会社は合璧をおいてほかにはないと思います。

わたしは病気のことを会社に報告すると、会社はいろいろな支援をしてくれました。林經理はすぐに医者に連絡を取って、翌朝早くにわたしが診察を受けられるよう自分の治療現金カードを使って申し込みをしてくれました。そして、この病気が長引かせてはいけないと気を配ってくれました。ところが、四日経っても病状はよくなりませんでした。元気なく会社に戻ると、今度は花經理が別の病院へ連れて行ってくれました。「この病院は腰椎の痛みの患者も多いし、4度か5度通えば少しずつよくなると思うよ」。これ聞いて、わたしは喜びました。と同時に上司たちの心遣いに温かさを感じました。

今度の病院では医者に病状を話した後、医者から治療の方法を聞きました。花經理はその治療をやってみなさいといながら、クレジットカードで1000元の診察料を払ってくれました。わたしは驚くとともに感謝の気持ちでいっぱいでした。その後、十数日が過ぎました。しかし、痛みは引かず、わたしは再び暗い気持ちに落ち込んでいきました。あれこれと考えた後、わたしは今回の件を労災として申請することにしました。というのは、今回の痛は仕事で引き起こしたもので、会社に対しては正当に賠償を求められることができると思ったからです。とにかく、このままではわたしは直に解雇され、残りの人生を生きていけなくなると思いました。

これに対して、董事長はわたしの腰椎のレントゲン写真を台湾に送るよういきました。台湾で最高の医者に見てもらおうためです。これ聞いて、わたしは深く後悔しました。会社はわたしを救おうとして全力を挙げていたにもかかわらず、わたしは法律によってこんなに素晴らしい会社を訴えようとしていたのです。わたしの口から「董事長、すみませんでした」のひとことがこぼれ出ました。

合璧はやはり大きな家でした。董事長はわたしの病状を知った後、わたしに支援と激励をくれました。地位もある董事長がわたしのような一従業員のことをこんなにまで考えてくれるなんて、わたしは董事長が生きた仏様に見えました。拝金、物欲主義が蔓延する今の社会で董事長はそれに染まらず、わたしに温かい手を差し伸べてくれました。「ありがとうございます。董事長」。

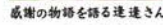
董事長はその日の朝、わたしを事務所に呼ぶとわたしに薬をくれました。それは以前自分が病気になったとき、苦勞して手に入れた薬の酒を薬局に調合してもらったものでした。そしてこういきました。「この薬はよく効くはずだから、持って帰って飲みなさい。君はまだ若い。もし、手術をする必要がある場合、一番よい医者に頼まなければならぬ。そうでないと、残りの人生をベッドの上で過ごすなければならない恐れがあるよ。わたしは君の腰椎のレントゲン写真を台湾最高の医者に診てもらっている。そして、最高の治療ができるように考えている。君は合璧に入って幸運だったと思うよ」。この言葉は深くわたしの心に残りました。そして午後になってもう一度董事長に呼ばれました。董事長は激励の意味を込めて500元をくれました。「滴る水の恩を大きな泉で返す」。わたしは董事長によって救われたのです。今後、病気が治ったら、この気持ちを忘れずに一生懸命働いて会社に恩返ししたいと思います。最後にもう一度、董事長、本当にありがとうございました。



善の循環、愛の伝達

「善の循環、愛の伝達」。これはよく聞く言葉ですが、わたしはこれを台湾で実感しました。わたしは今8日間の日程で台湾を訪れました。そこで最も多く聞いた言葉が「感恩」でした。最も多く見た人は「ボランティア」で、最も多く挙げたものが「涙」、そして最大の收穫が「笑顔」と「情熱」でした。わずか8日間という短い期間でしたが、わたしは人にとっても最も大切な「愛」と「情」を深く実感し、まるで魂が洗われたような気持ちになりました。

「感恩」というのは「感謝」に近い言葉です。しかし、「感謝」よりも心の深いところから感情とともに湧き出る言葉のような気がします。ですから、「感恩」にはしばしば行動に伴います。董事長がよくいう「感謝報恩（感謝に報いる）」や「知福、惜福、培福、種福（福を知り、大切に、培い、その種をまく）」もそういうことだと思います。「感恩」は台湾からの手紙でよく見かけます。しかし、それが台湾でこれほどまでに流行しているとは思いませんでした。それはよく人々の口にされ、行動となるのです。救助を必要としている人たちだけでなく、会社の仕入先、董事長の家族や親戚、台湾に多くいるボランティアの人たち、彼らは毎日この「感恩」の心で幸せな生活を送るとともに、回りの人のために自らを捧げているのです。これについて最も印象に残ったのが董事長の家族と食事をしたとき、董事長の四番目の義理のお姉さんの長女（逢逢さん）が涙ながら話したことです。彼女の語はこうでした。お婆さん（董事長のお母さんに当たる）が病気になったとき、彼女の母さんは毎週2時間バスに乗ってお婆さんの世話をしに行きました。お婆さんは車酔いがひどくてたいへんでしたが、それを年あまり続けました。その後、お婆さんの病気がさらにひどくなるかと、お婆さんは仕事を辞めてお婆さんのもとに移り住み、そこで看病に専念しました。そればかりか、当時まだ小さかった下のおじさんに服を作ったり、董事長に弁当を作ったり、経済環境のよくなかった甥や姪たちにも薬やお金をあげたりしました。これらはすべてこの「善の種を蒔いたこと」になります。後にお婆さんは、このご恩を感じた董事長から毎月生活費を送られることになりました。それは二十年以上も続きました。この援助は単に経済面で彼女を助けただけでなく、精神面での鼓舞も行いました。というのは、彼女は、彼女がカメラの電池を忘れたとき、ひとりのお婆さんが買いに行ってくれました。しかし、電池が高すぎるのと、その代わり後晩の11時に自分のカメラをホテルまで持ってきてくれたのです。



感謝の物語を語る逢逢さん

翌朝6時半、わたしは彼女の車が本社に着いたとき、董事長も支持のもと、二人の協力が中心となつて同僚たちが迎えに来てくれました。彼らは二列に並んで拍手をしながらわたしたちの到着を迎えました。これには涙が出るほど感動しました。わたしたちのような若輩者に対して、こんなにまで礼を尽くしてくれたとは思ってもしなかったからです。この日、わたしたちは顧問、董事長の家族、仕入れ業者などを訪問しましたが、どこでも熱心に歓迎を受けました。みんな早くからわたしたちの到着を待っていたようで、花籠や歓迎の言葉、中には爆竹まで用意してくれました。さらに帰り際にはプレゼントも用意されていました。

ボランティアは台湾の特筆すべき点です。統計によると、台湾の人口約2,300万人に対して登録されているボランティアは260万人にも上ります。こうしたボランティアはお寺や病院、観光エリアや交差点など人の出入りが多いところで活躍します。彼らは経を讀んだり、線香を点けたり、食事を作ったり、体の不自由な人を助けたり、病院の受付を手伝ったり、自分の仕事のない時間に、人のために働きます。董事長のいうことも休日を利用して3種類のボランティアを行っています。彼は自分の時間をこの事に捧げているばかりか、毎月何千元ものガソリン代を自腹で払って働くそうです。にもかかわらず、彼らの顔には不満は見られません。人のために働く喜びで輝いています。



信者のために幸運を祈る 行天宮のボランティア

8日の日程は瞬く間に過ぎました。しかし、わたしは今はっきりとわかります。わたしは台湾が好きになりました。それは雄大な101や美しい日月潭や神秘的な太魯閣があるからでも、青く広がる太平洋に面した海岸があるからでもありません。ここにはあふれんばかりの人情味があるからです。「知福、惜福、培福、種福」といった善の循環や「感恩」や「報恩」や「いたた愛の伝達があるから」です。

上海合璧品管課副理 周楠

小さな感動物語

合璧会社に入社して瞬く間に三年あまりが過ぎました。成功というにはまだほど遠いですが、何もわからなかった少女がこの三年間でずいぶん成長したと思います。ずっと努力を続け、作業員から品質検査員となり、そこで品質の重要性を実感するとともに、実習班長、さらに副班長に昇級しました。まだ何でもできるわけではありませんが、それでも多くのことを学びました。これからも自分を信じて頑張っていきたいと思っています。

さて、この期間中、わたしはもっとも影響を受けたのが董組長です。わたしが仕事でミスをしたとき、彼はいつも根気強くわたしを指導してくれました。ある日こんなことがありました。わたしのラインの同僚が完成品を隣の倉庫に運んだのですが、後で数量検査をした倉庫管理員が500個少ないのに気付きました。これ聞いたとき、わたしは何がなんだかわからなくなりました。届ける前にわたしも数量を確認していたし、あり得ないことだったので。そこで、わたしは完成品を運んだラインの同僚に聞きました。しかし、彼の返事は確かに倉庫の指定場所に運んだというのです。電源ケーブル本三十元。五百個なら相当な金額になります。このときわたしは完全に理性を失い、ラインの同僚も怒り出しました。そして倉庫管理の同僚がとくに組長に相談してみようといいました。組長は事の成り行きを聞いた後でもわたしを叱らず、完成品は倉庫内にあるはずだといいました。そしてみんなで倉庫の中を隈なく探しました。すると完成品は見つかりました。ほかの組の同僚が間違えてわたしたちのものや彼らのものをいっしょにしていたのです。このときの安堵の気持ちといったらありませんでした。本当に組長に感謝しました。

組長はこういいました。「管理者として何が起ころうと取り乱してはいけません。原因は何かを考え、問題の解決に当たるのが大事です。慌てても何の役に立ちません」。これ聞いて、わたしは感動しました。これはすべての人が学ぶべきことばだと思います。そして、こんな組長がいると、これから成長できるような気がします。

上海合璧製造課副班長 楊三妹

台璧は我等温モリの家；我は台璧を愛し、台璧は我を愛する；關心關懷關照 同心同歩同調！



一生懸命に働く 信じる力



楽しみとは何かと聞かれたら、その答えは人によって千差万別でしょう。ある人は家族との団欒のひととき、あるいはおいしい料理かもしれません。わたしの場合は一生懸命働くことが楽しみです。しかもこの楽しみは高い次元の楽しみです。一生懸命働くことは、その中に個人の仕事に対する態度や方法、やる気や責任感が見られます。それはちょうどわたしたちが毎朝行う5Sと同じです。この5Sについて、董事長はいいいます。「わたしたちの5Sは普通の5Sと違って程の5Sで、これは仕事や生活と密接な関係があります。一日の計は早朝にあり。その早朝に5Sを行えば、仕事にも身が入るということです」。

仕事は辛いときもありますが、それでも一生懸命頑張って続けることで人生の理想に近づくことができます。それに一生懸命仕事をしていれば、変な噂も気にせずいられます。こうやって苦勞して成し遂げた仕事の後は楽しみが待っています。これこそ本当の楽しみです。

合璧の40年にわたる発展は董事長の経営理念や企業文化と密接な関係があります。こうした諸々はわたしたちにも伝わります。以前董事長がこういいました。「何をすることも一生懸命やれば、60点を70点にすることができます。これも董事長の精神です。そしてこれができるのは合璧には「関心、關懷、關照（心配りと思いやりで接する）」という考え方があってからです。また、董事長は「わたしたちはお金儲けのために経営しているのではない。経営の目的は「感謝報恩、回饋社会（感謝と報恩の念を以って、社会に寄与する）」だ」ともいいます。これは口先だけの言葉ではありません。わたし自身も、何度となく董事長がそうしてきていたのを見ています。

わたしは2005年に合璧に入社しましたが、2009年まで董事長は毎年4回から6回ほど上海を訪れます。会社はおととしから「関心、關懷、關照（心配りと思いやりで接する）」を推奨していますが、その後董事長は時間を作っては従業員たちとのふれあいを増やしています。特に週末には従業員の見学、コンサートに講演会などさまざまなイベントを企画して、わたしたち従業員を楽しませてくれます。わたしは合璧の社員であることを幸に思っています。董事長はこの会社の家長で、わたしたちに無償の愛を与えてくれるからです。わたしたちはこれに報いるためにも一生懸命働かなければならないと思います。

合璧は本当に人を大切に会社です。信じる力で従業員に永遠の希望を与えてくれます。董事長の信じる力があるからこそ合璧の従業員たちは団結できると思います。力というものが生命と生活の源になるなら、この信じる力はまさにひとつの力です。わたしは仕事の中に信じる力をくわえることでさらに大きな力に変えていくことが大切だと思います。